

検査で早期発見を C型肝炎は「治る病気」に

放置すると肝硬変や肝臓がんに進行する恐れがあるC型肝炎。その治療法や検査の重要性などについて、県内の肝疾患診療連携拠点病院の一つである順天堂大学医学部附属静岡病院消化器内科の玄田拓哉教授に聞きました。

<企画・制作／静岡新聞社営業局>

自覚症状のない慢性肝炎

日本人の約100人に1人が感染していると推測されるのがC型肝炎です。慢性化しやすく、放置しておくとう肝硬変や肝臓がんを引き起こす可能性が高い国内最多のウイルス性感染症で、50代以上に多くの感染者がいると想定されています。血液や体液から感染しますが、感染源が不明な患者さんも多数存在します。

肝臓はある程度の障害を受けても代償作用が働いて、症状が出にくい「沈黙の臓器」と呼ばれています。特にC型肝炎ウイルスに感染していても慢性肝炎から初期の肝硬変の場合は自覚症状がほとんどありません。気付いた頃には重篤な状態というケースが多いので、早期発見・早期治療を行うために採血による肝炎ウイルス検査を強く薦めています。

大切な肝炎ウイルス検査

C型に感染しているかどうかは「肝炎ウイルス検査」を受ければ分かります。数時間後には結果が判明し、費用負担も少ない簡単な検査です。血液を調べ「HCV抗体」の項目を見れば、C型肝炎ウイルスに感染している可能性を知ることができます。ただ、通常の血液検査では「HCV抗体」まで細かく調べませんので、これまで肝炎ウイルス検査を受けたことがあるかどうかわからない方は、ぜひ一度「肝炎ウイルス検査」の血

液検査を受けるようにしてください。陰性なら、それ以後は安心して生活できます。陽性の場合には本当にウイルスに感染しているかどうかの精密検査が必要になるため、肝臓や消化器の専門医を受診してください。たとえ精密検査で感染していることが判明しても、新薬を飲めば最短2カ月でほぼ100%治せるので安心してください。

「肝炎ウイルス検査」を受ける以外にC型肝炎感染の有無を調べる方法はありません。しかし、健康診断で軽い肝障害があっても肝炎ウイルス検査をしていなかったため20年ほど放っておき、定年退職して病院に来た時には既に肝臓がんだったという事例もあります。検査の重要性が認識されていない現状では、検査で初めて感染が発覚し、治療に結びついたという例は極めてまれです。40～50代の人は働き盛りで、自覚症状の無さもあり、わざわざ「肝炎ウイルス検査」を受ける人が非常に少ないからです。

身体的負担少ない新薬

昨年発売されたC型肝炎の新薬は、最短2カ月の治療で100%近い効果が期待できます。また、この2月に発売されたばかりの新薬では、これまで治療ができなかった肝硬変の進行した患者さんや、これまでの治療がうまくいかずに薬に対して耐性を持ったウイルスに感染している患者さんにも使えるようになりました。このようにさまざまな薬が出そろった今、C型肝炎の治療は完成に



順天堂大学医学部附属静岡病院
消化器内科 玄田拓哉 教授

近づいています。患者さんが負担する実際の薬代は、国・県からの助成金により月1万円ほど。副作用も非常に少ないので、時間や費用、身体的な負担を心配する必要はありません。入院の必要もなく、通院で薬を飲むだけでC型肝炎を治すことができます。

今やC型肝炎は薬を飲めば必ず治る病気になりました。肝臓がんは治療の難しいがんの一つですが、C型肝炎の治療により予防することが可能です。ほぼ100%治るC型肝炎を放置して、肝臓がんという命にかかわる病気になってしまうことを避けるために、自分の肝炎ウイルス検査結果をご存じない方はぜひ一度肝炎ウイルスの検査を受けてください。現在、新しく感染する可能性はほとんどないため、肝炎ウイルス検査は一生に一度で十分です。定年後の人生を豊かにするためにも時間や手間を惜しまず、医療機関に足を運び、きちんと「肝炎ウイルス検査」を受けてほしいと思います。

肝疾患に関する相談・問い合わせ

順天堂大学医学部附属静岡病院「肝疾患相談支援センター」

伊豆の国市長岡1129 電055(948)5168

<<受付時間10～16時、土日祝・年末年始を除く>>

浜松医科大学医学部附属病院「肝疾患連携相談室」

浜松市東区半田山1-20-1 電053(435)2476

<<受付時間9～16時、土日祝・年末年始を除く>>